
人繋ぎ(ライナス&ルトガー)

ミニヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人繋ぎ（ライナス&ルトガー）

【Nコード】

N1535B

【作者名】

ミニヤ

【あらすじ】

封印時代、ルトガーは剣士として技術的には完成されているようですので、小さい頃に剣の基礎を習わせてしまい、後に復讐心から剣の腕を本格的に磨こうとする時に小さい頃、ほんの一時習った基礎がきっかけとなり、父親の血である剣の才能を本格的に開花させたのではと個人的に妄想（笑）なら、その役割を誰に任せるか。EDで疾風はベルンに行く・・・ならば疾風に任せてしまえと（爆）

「【狂犬】のライナスだ！」

と言えば、悪党は震え上がる。

彼を知らない者はいない。

黒いマントにたくましい体つき、

それでいて動きはしなやかで敏捷で実に素晴らしい。

彼が狙うのは弱いものいじめをする貴族や役人で……。

「ルトガー、ルトガー？」

歌うような、優しい声が自分の名を呼ぶ。

目を開けた。

すると、自分を微笑みながら見下ろしている女が目に入る。

彫りの深い、サカ人独特の顔つきと、

綺麗な黒い髪に澄んだ黒い目。身に纏っているのは民族衣装。

「う……ん、何？お母さん。」

呟いて、まだ眠い目をこすり上体を起こす。頭がぼんやりと働き始める。

少年が普段着ている民族衣装が着崩れしている。

少年の住んでいるここブルガルは、

ベルンの中でも山岳地方で特に豊かでなければ貧しくもなく、

人々は平地に集まるようにして住んでいた。

すぐ隣は広大なサカの草原で一年中雨が少なく、

たまに大雨が降るのは冬の間だけ、

そして、広大なサカ草原と共に生きる遊牧民との混血が多いと言う

土地だった。

それよりも、なにか、大切な事を忘れているような……。

「起きなさい、もう朝よ。」

外を見ると陽はとつくに上がっている。その瞬間、一気に全てを思い出した。

「いけない！」

ルトガーと呼ばれた少年は飛び起きた。

「何だか楽しそうね。」

いつになくにここにこしていて楽しそうな息子を見つめながら母親が聞く。

「いい夢を見てたんだよ。」

「まあ、どんな？」

「父さんの夢。」

そう言うとも母親はまあ、そうだったのと微笑んだ。

母は自分に亡くなった父の事をよく話してくれた。

ルトガーに父の思い出はほとんど無い。

ただ、とても大きい人で、よく肩車をしてくれたのをかすかに覚えている。

その内にルトガーは母親が父と結婚するまでは身寄りの無い娘だったのを知った。

随分前に母の父はサカの戦士で、母親はベルン人だったと教えてくれた。

父の死について、少年は事故としか聞いていなかった。

「今日も遅いの？一体どこで何をしているの？」

既に用意されていた朝ご飯を瞬く間に食べ終わると、

ルトガーは慌てて外に飛び出したのだった。

「内緒！」

母は表に出るとすごい勢いで走っていく息子の後姿に微笑みかけ、茶色い髪が遠ざかるのを見送った。

ルトガーは見慣れた町並みの中を走った。

ブルガルではサカの民族衣装を着た人々が多く、

髪や瞳の色もほとんどが黒や深緑だった。

その中に明るい茶色い髪をなびかせた少年が入っていくと、

周囲の人々の目は知らず知らずのうちに彼に集まってしまう。

ルトガーは綺麗な少年だった。

生まれた時には父親譲りの茶色い髪と大きな茶色い目をしていて、まっげは長く整った顔立ちである。

それは、サカの血が混ざっていると感じさせない容姿だった。サカの血を引くものは大方サカの容姿が濃く出る。

けれどルトガーの容姿はサカよりベルンの血が濃く出たようだった。

ルトガーの場合、父も母もサカとベルンの混血だった。

母方の（ルトガーから見ても）祖父はサカ人で、祖母はベルン人。父方は祖母がサカ人で祖父がベルン人なのだと聞いた。

ルトガーの母親はサカの容姿が濃く出ていたのだが、同じベルンの混血だった夫と夫の兄もルトガーと同じくベルンの血が濃く出ていて

サカの血が入っているようには見えなかったのだと言っていた。少年は幼心に自分が注目されるのは容姿のせいだと知っていた。

それで自分と周りの人間が容姿の違う事を気にしていたのだが、意に反して周りの同年代の友人や大人は優しく、

一度たりともそれが原因でいじめられる事はなかった。

ルトガーは一旦止まると息を整えた。

昨日、激しく体を動かしていたのでまだ所々体が痛んだが、こうして走っているうちに慣れてきた。

走る足を速め、目的の場所へ向かう。

広い野原に緑一面の畑。

生垣に囲まれた小屋そんなものがどんどん目に飛び込んできては去っていく。

少年の頭に浮かぶのは昨日の事だった。

ルトガーの住んでいる小さい町の外れには奥深い谷があった。

この谷には生い茂る森と、草原を旅する者達の無事を祈る像と札が祀られていた。

昔は参拝する人が多かったのだがいつの間にかさびれていた。

夕方、陽が落ちる頃には人影が見えず寂しさにつつまれている。

だが少年はここが好きだった。

人は淋しいと言うけれど、ここにはいつも風の声や森の木々の声が満ちている。

そして、少年は剣に見立てた細長い枝を振り上げた。

えいっえいっとルトガーは声を張り上げ、

天狗のように飛び跳ねて枝をふるって辺りの木々をなぎ、石を打つ。激しい剣術の練習だ。

少年は剣を習った事は無かったけれど、

ブルガルに寄っていくサカの戦士達が時折見せる技を少年はよく見て覚えていた。

「よう、坊主。中々いい腕をしているな。」

不意に背後から声がして、

ルトガーがそちらを向くといつの間にか紫色の長い髪をなびかせた、たくましい体つきをした男が立っていた。

その男と出会ったのは偶然だった。

「？」

こんな人気の無い所に、何故来たのだろう。不意に警戒心が湧いた。

「おじさん、誰？」

「旅人さ。」

男は少年の緊張した様子に気づいているのかいないのか、

ルトガーの顔を見ながら特に近寄ってくる様子も無く答えた。

「この辺に旅人の無事を願う場所があるって聞いたんだがな。知ってるか？」

「ふん。じゃ、ここの近くだから案内してあげる！」

「そうか、ありがとうよ。」

その言葉で何かされるのではないかと言う不安も消え、祠まで案内した後、

自分はまたもといった場所に帰ると稽古を再開した。

しばらくして、男が戻ってくるのが見えたのでそちらを向いて腕を止めた。

男が自分に近寄り声をかけてくる。

「さつきはありがとうな。」

男が優しい笑みを浮かべて少年を見つめてくる。

「いいよ。」

「お前さんは、この辺りに住んでるのかい？」

「うん。そくだよ、何で？」

「いや、お前さんみたいな顔つきをしている奴はこの辺りで珍しいからな。」

お前さんも誰か旅行者の子供かと思ったよ。」

その言葉を聞いて少年のどこかがどきつとした。

「僕の父さんはベルン人なんだ。僕は父さん似なんだって。」

母さんはよくある事なのよって言うよ。」

男が頷く。

「ああ、よくある事さ。ところで坊主、一人で剣の練習をしてるのか。」

「うん！僕の父さんとはとても強い勇者様だったんだ。」

お母さんから聞いたから本当だよ。

だから、僕も父さんみたいに強くなるんだ！」

そう言つて木の枝を振り回す。男はその様子を見ていて何かに気付いた。

誰かに重なるのだ。茶色い髪、茶色い目・・・細面で・・・

「お前さん・・・。」

「何？」

「父親の名は何と言う？」

「ライナスだ！正義の味方だよ！」

少年が自信満々に言うのを聞いて、男の目が更に優しくなった。

「そうか・・・。」

「？おじさん、父さんの事知ってるの？」

首をかしげる。

「ああ、知ってる。あいつはいい友人だった。」

少年の目が輝き、飛び跳ねるようにして男の服の裾を引っ張った。

「聞かせて！父さんの事！」

「何だ何だ、母さんは聞かせてくれなかったのか？」

かがんで、男はルトガーの小さい頭を撫でてくる。

「うっん、たくさん聞かせてくれるよ。でも、おじさんは父さんの友達だったのでしょうか？」

母さんの知らない父さんの事も色々知ってるんじゃないかって・・・。

男は自分の言い方が面白かったようだ。

近くの石に腰を下ろすとまだ自分の服のすそを握っている少年の手をそつと外す。

「いいだろう。なら座りな、少し昔話といくか。」

ルトガーは大喜びで隣に座る。男は少年に父親について色々な事を話してくれた。

父親の性格や父の兄の話、

男が世話になったというルトガーにとっては祖父に当たる人物の話、素晴らしい剣技の事など。男がひとしきり話し終わった後、ルトガーはほうつとため息をついた。

「そつかぁ・・・おじさんはお祖父さんの事も知ってたんだ。

それからロイド叔父さんの事も・・・。」

「ああ、まあな。」

「母さんが言ってたんだ。

僕は最初、父さんやお祖父さんみたいに斧を使いたかったのだけど、母さんがあなたにはまだ無理だって。」

その言葉を聞いたとたんに男は噴出した。

「ははっそりやそくだ。斧を扱うにはある程度体格と腕力が要るかな。」

お前の親父も、親父の親父も大男だった。」

「うっん、やっぱりそうなんだね。」

僕がすぐ斧を使いたいんだって駄々をこねたらお母さんが父さんのお兄さん・・・

ロイド叔父さんの話を話してくれたんだ。」

「どんな風に？」

「”お父さんのお兄さんはね、それは素晴らしい剣士だったのよ。”
”って。”

それから“お父さんはお兄さんとしても仲が良くて、たくさん話を聞いたわ”って。

僕は会った事も無いけれど・・・ずっと憧れてた。」

「ああ、それはいい事だな。」

「ねえおじさん、おじさんは強いでしょう？父さんの仲間だったんだもの。」

「そりゃ、人並みにはな。」

「お願い、僕に剣を教えて！僕、母さんや友達を守れるように強くなりたいんだ！」

「そうか・・・。だが、それなりに厳しいぞ？」

「そんなの平気だよ！」

「よし、分かった。」

「やった！」

「ただし、俺と稽古すると言つ事を誰にも知られないようにしろよ。」

「

「お母さんにも？」

「ああ、誰にもだ。」

その日は男と共に晩まで稽古をした。

男は主に使う刀と護身用だという二本の刀を持っていた。

今まで剣を見た事はあっても実際に使った事の無いルトガーにそれは重く、

扱いにくかった。

剣の握り方から始まって次に振り方、身のこなし方を教えられた。

男の腕は確かで、

恐らく自分でも気付かなかったであろうルトガーの剣の腕を瞬く間に上達させた。

男は物知りで稽古の合間に剣術の他に簡単な兵法を教えてくれた。
ブルガルから出た事の無いルトガーは、
ブルガルの事はよく知っていても、
世の中の姿と言うものはよく分かっていなかったから、
それは貴重な知識だった。

「行きましたか。」

不意に、ルトガーを見送る母親の背後から男の声がした。
だが母親は後ろを振り向かない。相手が誰なのか知っていたからだ。
前を見たまま頷き、聞く。

「突然どうしたのです？また・何かの知らせですか？」

「いや、たまたま近くに用がありまして。ついでと言っただけなんです、

あなたやお子さんがどうしているか気になりましたね。」

「・・・あの人がいない事を除けば、何とか暮らしております。

あなたはこれからどうされるのですか？」

「しばらく・・・と言っても1、2日ですがあの坊やに付き合いますよ。

でも、そう長い事ここにいる訳には行きません。

しかし本当、父親によく似ている・・・。」

懐かしそうな色を含ませて言う男は夫の昔の仲間である。

数年前、自分に夫の死を伝えるに来たのも彼だった。

「やはりそう思いますか・・・

髪の色や顔つきは元々あの人の似てましたが、最近は性格まで似てしまっ
て・・・。」

背後にいた人物が隣に並んだ。

「昨日剣技の真似事をしていたのを見ていましたが、
中々筋が良さそうで驚きました。やはり血ですかね。」

「そうですね・・・父のように強くなるんだと言っるのが口癖です。

すぐ無茶をしたがるので心配ですけど。」

母親は隣に立った男の顔を見る。この辺りの人間には珍しい紫色の髪。

長い髪の毛が風になびいている。

顔には二本、うつすらと切られたような傷跡がある。

彼を見て、母親は昔の事が鮮明に思い出された。

自分が夫であるライナスに手を引かれ初めて彼の父に紹介された時の事である。

夫や夫の兄の仲間だという人々がかなりの人数いて自分はひどく緊張していた。

その中に今、自分の隣に立っている男がいた。

冷やかしつともとても祝福してくれた・・・。

「なに、子供つてのはそれぐらいの威勢と冒険心がないと。」

男のその声ではっとして現実に戻る。

「では、失礼。これからあの子との約束があるんで。」

そう言うとなりの気配はすぐに消えた。

彼女はその言葉で、

息子がどうしてあんなに機嫌がよかったのか分かった気がした。

ルトガーがいつもの場所にたどり着くと、昨日の男は既に石に腰掛けて待っていた。

「寝坊か？遅かったな坊主。」

「ルトガーだ！」

少し怒ったように言うとなりは言い訳するように両手を上げた。

「分かった分かった。」

「早く始めようよ！」

「いいだろう。」

男は休憩、稽古、休憩を適度に入れ、打ちかかって来るルトガーを器用にいなしながら、

直した方がいい部分を的確に助言してやる。

何度目かの休憩の後ルトガーは目をつぶり、

男が貸してくれた剣を取り落とすとはっはと息を切らしながら地面に倒れ込んだ。

既に空が赤く染まっている。

「やはり、血は争えないねえ。」

腰を下ろした男が、まだ息の荒いルトガーを見守りながら言う。

その顔には笑みが浮かび楽しんでいるようだった。

「え？」

男の言葉に目を急いであけて上体を起こす。

「お前は優秀だよ、この二日間で見違えるように成長した。」

「本当!？」

少年が目を輝かせる。

「だが」

すかさず続ける。

「お前の親父にはまだまだ遠い。」

「そっかぁ・・・そうだよな。」

ルトガーがそう呟いた時、さて・・・と、男が立ち上がった。

「おじさん？」

急に不安になる。

「明日も、また稽古してくれるよね？」

念を押すように言うと、男が苦笑しつつ頭を撫でてくれた。

「すまねえ、俺は、もう行かなくちゃならねえ。」

ゆっくりと噛み締めるように男が言葉を紡ぐ。

やっぱり、とルトガーは淋しい気持ちになった。

「そっかぁ・・・。」

ぽつんと呟いてルトガーは俯いた。たった1、2日の事だけれど、ルトガーは大の大人の男とこうして稽古をして過ごす事が嬉しかったのだ。

だがここで駄々をこねたら男も困るだろう。

ルトガーは淋しい気持ちを押し殺して顔を上げ、

高い位置にある男の顔を見つめた。

「おじさん、一つだけ教えて？」

「何だい？」

「おじさんの名前教えて？」

僕こんなにお世話になったのに、おじさんの名前も知らないから・・・。

男がそれを聞いて笑みを浮かべた。

「ふふ、そう言えばそうだったか。俺は【疾風】と言う。」

「ハヤテ・・・？」

「じゃあな坊主、達者で暮らせよ。」

それから母さんの事を大事にな。会えて嬉しかったぜ。」

「うん、僕もだよ。僕もつと強くなるからね！！おじさんも元気でね！」

少年は男の後姿を見続け、その後姿が消えてなくなるまで手を振り続けた。

去っていく男の目に笑顔とともに一筋頬を伝うものがあつたのを少年は知らない。

（後書き）

こちらもちらほらと見かけたので捏造してみましたライナス親子話です。これも面白い説でした。ちなみに自分、ルトクラ好きです。疾風との絡みは単純にルトガーがいつ頃本格的に剣を習ったのだろう、と言う疑問からきました。デイクの場合は幼い頃から剣士だったので特に問題ないのですが、ルトガーが本格的に剣士を目指した理由は、ブルガルにて大虐殺が行われた後の復讐心からかな・・・。

。小さい頃は男の子らしく剣士の真似事をして遊ぶ事はあっても、デイクのように本格的に習ってはいないと思われます。ルトガーは小さい頃は素直な甘えっ子だったのではないですかね・・・。彼が無口になったのは自分以外の人々が惨殺されるのを見てしまったせいっぽいです（泣）余談ですがロイド親子とライナス親子は父親と息子のクラスが正反対なので、お互い叔父さんに憧れたのかなと勝手に妄想しました。本当の設定が実は親子でなく、従兄弟でないとしてもデイクとルトガーは仲良しでいて欲しいものです。長々と失礼しました、拝読本当にありがとうございます。楽しんで頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1535b/>

人繋ぎ(ライナス&ルトガー)

2010年10月22日00時49分発行